



国指定史跡 津田永忠の墓所

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tonohide Eguchi

閑 谷学校から西へ伊里川沿いを五〇〇ほど進むと、津田永忠の屋敷跡がある。建物はなく、

石垣のみが残り、日当たりがよく、気持ちのよい場所だ。そう、閑谷学校を守るため津田永忠が下した最後の決断とは、彼自身が閑谷に移り住むことだった。

元禄十六年頃の永忠の書状には次のように記されている。「故少将様（光政）被思召立候御趣意ノ通達仕二ハ、私並子共、閑谷ノ百姓ニ罷成、学校ヲ守り立候外ハ無之と奉存候、廿年以前ニも此存寄可申上儀ニ御座候へ共、重キ御用被仰付」。主君池田光政の遺志である閑谷学校を守り抜くためには、自分と子が閑谷の百姓になる他はない。それは光政が死去した二〇年前からの願いだったが、要職についたばかりで出来なかったのだという。

書状の続きには「少将様（光政）御書置之御文言ノ内ニ何事ニても当少将様（綱政）被仰付候御用可相勤」とあり、永忠が綱政に仕えていたのは、光政の遺言だったからだと述べている。彼の願いは、あくまでも光政個人の臣下として主君の宿願を貫徹することであり、自分はおろか子まで百姓になっていいから、閑谷に移り住みたいというのだ。この永忠の願いは綱政に許され閑谷に移住したが、不運にも三年後に病に倒れてしまった。六八歳だった。

さて、もと来た道をもどり、津田永忠の墓所へと向かうことにする。閑谷学校とは山陽本線を挟んだ反対側で、和気町の奴久谷にある。地図で詳しい場所を確認できなかったが、辻々に小さな案内板が立てられていた。これなら迷う心配はない。

まわりは田んぼと民家の里山風景で、墓所はすぐ先に見える山懐の小さな集落を抜けた辺りのようだ。その集落に差し掛かると民家の庭にいた若い妊婦さんが、笑顔で挨拶してくれた。

「あんな可愛い人が住んでいて、挨拶までしてくれるなんて、ここは桃源郷じゃないか」と同行者。「あの人は、ちゃんと生きているのか。天使じゃないのか。私たちは実は死んじやっているのかも」と真顔でいう。確かに同行者がいうのもわかる。小さな集落にもかかわらず、若者や子供の姿が見られ、みな明るい。どこか浮世離れしているようにも思える。

集落を抜け、急な石段を上ると、小さなテラスに墓所があった。閑谷と同じで日差しも温かく、きれいに清掃されていて清々しい。永忠と父母妻子が眠る七つの墓は、小さな石柱が土饅頭の前に立てられている質素なものだ。同行者が、こんないい場所だとは思わなかったと感心している。「こんな神聖な場所では、おやつは食えないなあ」とつぶやく。



津田永忠の墓所

[交通] JR吉永駅からゆっくり歩いて1時間ほど